- 高望王　從五位下上總介賜平姓
  - 國香　從五位下鎮守府將軍
  - 貞盛　從三位鎮守府將軍
    - 維衡　從四位下上總介伊勢平氏祖
    - 繁盛　城氏祖　鎮守府將軍
    - 維將
    - 維時
    - 直方　此間維方聖範時方時家ノ四世ヲ經タリ
- ○時政　執權二十五年卒年七十八　○八執權ナリ
  - 宗時
  - ○義時　執權十年卒年六十二
    - ○泰時　執權十八年卒年六十
      - 朝時
      - 政村
    - 時房
    - 政子
  - 時氏
  - ○經時　執權四年卒年三十三
  - ○時賴　執權十年卒三十七
  - ○貞時　執權廿八年卒年四十一
- ○時宗　執權二十一年卒年三十四

- 宗政
- ○師時　執權十一年卒年三十七
- ○高時　執權十八年死年三十一
  - 時行
  - 泰家
  - 正衡
  - 正度　正五位下少納言
  - 忠盛　刑部卿
  - 正盛　從四位下少納言
  - 重盛　正二位內大臣
    - 清盛　從一位太政大臣
    - 經盛　參議從三位
      - 經正
      - 經俊
      - 敦盛
      - 教盛　從二位權大納言
      - 通盛
      - 教經
  - 基盛　正四位下
  - 行盛
  - 宗盛　從一位內大臣
  - 清宗
  - 知盛　權中納言
  - 知章
  - 知忠
  - 重衡　正二位左中將

- 賴盛　正二位權大納言
- 忠度　從四位下薩摩守
- 建禮門院　中宮德子　高倉帝后安德帝母后

六代

- 惟盛　從三位左中將
- 資盛　從三位左中將
- 親眞　始氏織田子孫世仕斯波氏
- 清經
- 有盛
- 師盛
- 忠房

自親眞至敏定其間十四代

- 敏定　大和守　將軍義政賜尾張國城清須
- 信定　彈正忠　斯波氏遺種爲敏定所立
- 信秀　備後守
  - 信長　右大臣
    - 長益
  - 信忠
    - 秀信
  - 信雄
  - 信孝
  - 秀勝

治承ノ變

初メ源平二氏武ヲ以テ家ヲ興シ、互ニ朝廷及ヒ藤原氏ノ羽翼ト爲リ、以テ相鉗制ス、平治ノ亂ニ至リ、源氏ハ一敗振ハス、平氏獨リ其威ヲ逞クシ、遂ニ藤原氏ノ全權ヲモ奪ヒテ天下ノ事ヲ擅ニスルニ至レリ、諸國源氏ハ僅ニ其地ニ安スルノミニテ、朝廷ノ上ニハ獨リ源賴政ノ存スルノミ、賴政平治ノ亂官軍ニ屬シ、其家ヲ保ツト雖トモ、僅ニ大內ノ守護ニ過キス、老後清盛ノ奏請ニ依テ三位ニ進ミシハ、益シ異數ノミ、故ヲ以テ常ニ不平ヲ蓄ヘ、隙ヲ見テ恢復ヲ計ルノ志アリ、此時平氏益驕傲忌憚ルナシ、賴政ノ子伊豆守仲綱事ヲ以テ宗盛ヲ恨ム、賴政聞テ益不平ナリ、時ニ清盛兇暴日ニ甚シ、法皇ヲ幽閉シ、廷臣ヲ貶竄ス、天下之カ爲ニ怨讟ス、（保元平治物語、源平盛衰記、）賴政竊ニ後白河帝第三皇子以仁王ノ三條高倉宮ニ詣リ、說クニ大義ヲ以テシ、兵ヲ擧クルコトヲ勸ム、王才名夙ニ著ハレ、人多ク望ヲ屬ス、然レトモ母ノ寵ナキヲ以テ親王タルヲ得ス、居常鬱々タリ、是ニ於テ賴政ノ言ヲ聞キ、慨然トシテ之ヲ許シ、源行家ヲ遣シ令旨ヲ諸國ニ頒タシメ、別ニ一通ヲ以テ源賴朝ニ賜フ、行家熊野ノ僧徒ニ約シテ兵ヲ起サシム、僧徒密ニ相告語シ、事竟ニ泄ル、（源平盛衰記）本宮別當湛增平氏ト故アリ、兵ヲ帥ヰ新宮ヲ攻メ反テ敗ラル、使ヲ馳セ之ヲ平氏ニ報ス、清盛大ニ驚キ、五月十五日檢非違使源兼綱等

ナシテ高倉宮ヲ圍ミ、以仁王ヲ收メシム、兼綱ハ頼政ノ子ナリ、而シテ清盛未タ頼政ノ主謀タルコトヲ知ラス、是ニ於テ兼綱急ニ頼政ニ告ク、頼政乃チ王ニ勸メ園城寺ニ遁レシム、王婦人ノ服ヲ被リ、潛ニ宮ノ北門ヲ出テ、（高倉宮ハ、三條ノ北高倉ノ西ニアリ、樋門ハ三條ニ面シ、小門ハ高倉ニ面ス、北面モ又小門アリ）高倉ヲ北行シ近衛ニ至リ、右折シテ鴨河ヲ涉リ、白川越ヨリ山路ヲ經園城寺ニ走ル、遲明源太夫判官兼綱、出羽判官光長兵三百餘ヲ將テ王ノ第ヲ圍ム、兼綱故ヲ以テ門外ニ在リ、光長入テ王ヲ索ム、留守長谷部信連力戰之ヲ拒キ、殺傷過當刀折ル、衆之ヲ捨シ以テ還リ、之ヲ伯耆ニ流ス、王既ニ園城寺ニ至リ法輪院ニ居ル、僧徒力ヲ戮セテ之ヲ守ル、頼政知ラサル爲シテ留ル數日、六波羅ノ動靜ヲ窺ヒ之ヲ襲ハントス欲ス、間ヲ得ス、二十日擧族及渡邊黨五十餘騎ヲ率ヰ、近衛河原（今ノ荒神口ノ邊ナリ）ノ第ニ火シ、往テ王ニ園城寺ニ從フ、（平家物語、）宗盛素ヨリ頼政ノ士渡邊競ノ勇名ヲ聞キ、人ヲ遣シ之ヲ闕ハシム、歸リ報シテ曰ク、猶家ニ在リト、乃チ召シ見テ故ヲ問フ、競紿キテ曰ク、頃日愛ヲ入道ニ失フ故ニ從ハスト、宗盛大ニ悅ヒ、（源平盛衰記）賜フニ名馬南鐐ヲ以テシ已ニ從ハシム、（平家物語）初メ頼政ノ京師ヲ去ル、衆競ニ告ケンコトヲ請フ、頼政曰ク、彼勇略ニシテ我ニ忠ナリ、告ケサルモ且ツ來ラント、既ニシテ競馳セ至リ南鐐ヲ示ス、仲綱大ニ喜ヒ、其尾鬣ヲ翦リ、平宗盛入道ノ五字ヲ火印シ、六波羅ニ放還ス、（源平盛衰記、平家物語）頼政大衆ヲシテ延暦興福二寺ニ牒シテ援ヲ請フ、南都ノ大衆未タ至ラス、而シテ山徒孤軍援ナキヲ見テ約ヲ變セントス、乃チ議シテ曰ク、寡ヲ以テ衆ヲ擊ツ、夜戰ニ如カス、今夜先羸弱一二千ヲ如意峰ニ陣セシメ、歩卒ヲシテ火ヲ法勝寺三條河原祇園ニ放タシメハ、平氏必ス出テ禦カン、我兵乃チ佯リ退キ、敵ヲ岩本櫻本ニ誘ヒ、別ニ精鋭數百ヲ以テ、虛ニ乘シ六波羅ヲ襲ヒ、火ヲ上風ニ放チテ之ヲ攻メハ、則チ克タサルコト無シト、大衆皆其議ヲ然トス、獨リ一如坊眞海竊ニ平氏ニ黨シ、異議時ヲ移ス、（平家物語、源平盛衰記、）乘圓坊慶秀曰ク、利速戰ニアリ、吾當ニ先驅スヘシト、衆乃チ路ヲ分テ發ス、頼政僧徒一千餘人ヲ將テ如意峰ニ向ヒ、仲綱兼綱等七百餘騎ヲ率ヰ、間道ヨリ六波羅ヲ襲ハントス、山階ニ至ル、天已ニ明ク、因テ軍ヲ引テ還ル、（源平盛衰記）廿一日、頼政遂ニ王ヲ奉シ山科ヲ經テ南都ニ赴ク、王途上倦睡馬ヨリ墜ルコト六度、乃チ宇治平等院ニ入リ、宇治橋ヲ撤シ以テ平軍ニ備フ、清盛之ヲ聞キ、平知盛平重衡等ヲシテ兵二萬餘ニ將トシテ之ヲ追ハシム、廿二日黎明、大霧咫尺辨セス、平軍橋ニ至リ墜死スル者二百餘人、頼政ノ部下死力ヲ出シテ奮鬪ス、平軍進ムコト能ハス、既ニシテ足利忠綱等三百騎流ヲ亂シテ濟ル、大軍之ニ躡キ、大ニ平等院ノ前ニ戰フ、兼綱戰死シ、士卒多ク亡フ、頼政王ニ告ケテ曰ク、事敗ル、大王宜シク速ニ南都ニ赴クヘシ、臣此ヨリ永訣セント、敵

ヲ射テ之ヲ却ケ、矢竭ク、乃チ平等院ノ釣殿ニ入リ、甲ヲ脱シ端坐シ、從容和歌ヲ詠シ、刃ニ伏シテ死ス、時年七十、仲綱亦自殺ス、以仁王間ヲ得テ南走シ井手渡ニ至ル、而シテ平將景高數百騎ヲ以テ王ヲ追ヒ、光明山鳥居前（井手ノ玉川ヲ距ルコト數町、今ノ井手村ノ南ニ當ル、盛シ當時奈良街道ハ、今ノ街道ヨリ東北ノ山麓ニアリシナルヘシ、）ニ及ヒ、亂射雨ノ如シ、王終ニ流矢ニ中リ、馬ヨリ墜チテ斃ス、時ニ年三十、此時南都大衆大兵ヲ以テ木津ニ至リ王ヲ迎フ、王ノ敗死ヲ聞キ、兵ヲ引テ還ル、（記、長門本平家物語、源平盛衰記、玉海、山槐記、皇胤紹運錄、）賴政高齡ヲ以テ天下ノ爲メニ大義ヲ首唱シ、事成ラスシテ敗衂ス哀ムヘシ、然レトモ異日諸國源氏競ヒ起リ、賴朝遂ニ平氏ヲ殄滅スルモノハ、賴政ノ力ニヨレリ、豈成敗ヲ以テ其跡ヲ論スヘケンヤ、茲ニ實地ニ徵シ戰圖ヲ作リ、以テ一斑ヲ知ラシム、

福原遷都

桓武帝平安京ヲ建テヽ、以テ萬世不遷ノ帝都ト定メラレシヨリ、一千百年ノ久シキニ亘リ、其變動ノ如キ唯福原遷都ノ一事アルノミ、僅ニ數月ヲ出テス舊ニ復シ、遷都ノ實ヲ見スト雖トモ、國史上ノ重件ニシテ、平安京ノ爲メニハ寡モ考査セサルヘカラサル事タリ、因テ今古書ニ據リ、當時ノ記事ヲ抄出シ、以テ其實況ヲ表シ、然ル後其考證ノ意見ヲ述ヘントス、當時ノ古書中此事ヲ記シタルモノ、玉海、山槐記、方丈記、續古事談、源平盛衰記等ヲ主トス、

玉海治承四年ノ記事ニ、六月小、一日（壬午）晴天、午刻叅院、明曉福原遷幸、（行幸及兩院御幸云々）已以一定云云、余以使者問可叅福原哉否於入道相國、報云、無可寄宿之所、仍忽不可叅、進自被申可案內云云、先是候上皇其拂客之處、仰云、叅御共之輩、偏以禪門之左右也、一切不被仰是非、只聞食許也云々、二日、（癸未）天晴、卯刻、行幸於入道相國福原別業、（中略）敢無知由緒之人、疑可被攻南都（大衆猶蜂起敢無）之間、可有不慮之恐歟、又餘黨猶不休、爲禦被怖畏歟、（中略）又云、留洛陽之輩中、有可蒙刑之者云々、凡異議紛紜、巷說縱橫、只天魔謀滅朝家、可悲云々、（此次遷幸ノ顚末ヲ記メレトモ之ヲ略ス）十三日云々、叅福原離宮、到草津乘船、終夜浮淀川、十四日寅刻、就邦綱寺江山庄、到于大物駕輿云々、此間頭辨以御教書、問遷都之間三個事云々、戌刻到福原、於湊川邊改乘車、亥一點就大納言（邦綱ナリ）宿所云々、先叅新院御所、（賴盛卿家也、去四日渡御、以本御所爲內裏云々、）十五日隆職來、談遷都之間事、（持來奈良京畿指圖）賴業來、前大納言來、巳刻叅內、招頭辨經房、昨日所被被問之三個條示子細畢、一左京條里不足事、一右京平地不幾事、一大嘗會事、（以下三個條ノ意見アレト、福原ノ事ニ係ルヲ以テ之ヲ明ニス、）又八月三日ノ條ニ清原賴業ノ話ヲ記シテ曰ク、三日癸未云々、大外清原賴業來云々、嵯峨隱君子、嘗道命期勘文、不可改平安宮之由、有處見、貞觀之比、依大極殿炎上、時久可有遷都之由謳歌、且是古昔之例、大途經八十年、有遷都、延曆巳

後及八十年、疑其期至歟云々、隱君子聞之云々、桓武聖主、鑒此地久可爲帝都之故、新處營給也、東有嚴神、（醍醐茂賀）西有猛靈、（醍醐尾校）南開北塞、又見地、宜足可爲帝都、永代不可變易之趣、其被勘錄了、且是非管術之處及、以人意不可測定之、令然云地也云々、而今有遷都之儀、我朝君遲者、此事不可遂、我朝君可愚者、此事可成就歟、國之安危、只在此事、遂可見歟云々、（以上靈ノ頼業ノ話ヲ記セシナリ、清和帝ノ時遷都ノ議アリシ事他見ル所ナシ、姑ク此ニ記ス、吉記ノ說大略之ニ同シ、）

十一月五日、傳聞宗盛可有遷都之由、示禪門云云、不承引之間、及口論、人以驚耳云々、十三日於福原離宮新造皇居、被行万機旬十四日、此日欲叅福原之所、可有歸都之由、一定了云云、仍爲聞慥說、暫以遲留入夜、人傳云々、十九日傳聞遷都、來廿六日御出門、來月二日可有御入洛之由被仰云々、廿一日、未刻自福原人告云、遷都被縮畢、來廿三日出門、廿六日御入洛、必定了云々、廿六日云々、欲叅會鳥羽之處、行幸早成、仍於七條朱雀辻叅會供奉、日未沒西山、着御五條第、（邦綱家卿）云々院入夜御入洛、御賴盛卿六波羅第、（號池殿）法皇未刻許御入洛、御故內大臣六波羅第、（號泉殿）忽然遷都、神不降禍、人皆稱禍、而依神明三寶之冥助、今有此遷都、四海之中、莫不歡娛、此事誠是散衆庶之怨、協万民之望者也、

又日々、禪門相國、忽變中心之懇望、聖主仙院、各歸上都之宮闕、人雖有悅色、世遷成奇思歟云々、關東之謀叛、綺起於遷都云々、君王若歸京都者、賊徒何亡民烟哉、（是一）台嶽之衆徒、上度々之奏牒云々、所申非無理、尤是可裁許、（是二）新院御惱追日有增云々、枉可有歸都之由、院宣及再三、不能默止云々、（其三）禪門深悔積惡之重、爲蕩神明之此儀出來云々、依如是等之由來、忽不慮之還都、是天下之所謳歌、强非浮言、

百錄抄ニ曰々、六月二日行幸攝津國福原、法皇新院同以臨幸、貴賤上下、出平安舊城、赴攝州新都、今日着御寺江頓宮、翌日乘御船、着御福原、世專號之遷都、入道大相國申行之、九日差遣大納言藤原實定、參議源通親、左中辨藤原經房、左少辨藤原行隆、左大史小槻隆職、右大史小槻國宗等於輪田、點定遷都之地、左京條里不足、又無右京云々、十一日於新院殿上、被議遷都事、左大臣已下參入、以輪田被定其所、而條里不足、亦可被縮宮城歟、又平地內無右京、當西有山、隔件山、被用右京如何、山谷相交、可有其難、人々定申云、左京不足、右京山谷相交事、有何事哉、於被縮宮城之條者、不可然也、廿二日、右近權少將平維盛朝臣、爲追討關東賊徒發向、承平天慶之例、幽玄之間、今度就嘉承例、所被行也、不給節刀、賜驛鈴、十一月三日、東國追討使維盛朝臣歸京、賊徒其數千万、依不可敵對、空引歸、十一日、遷幸福原新造內裏、入道大相國所造進也、廿三日、俄立新都、可還幸舊都、今日遷御邦綱卿

新造亭、兩院同御幸、廿六日着御舊都、万民有悦色、依東國逆亂、忽有議所歸都也、鴨長明方丈記ニ曰ク、おなし年（治承四年）の水無月の比、にはかに都遷侍りき、いと思ひの外なりし事なり、大かた此京の始をきけは、嵯峨天皇の御時都ときさたまりにけるより、後まては四百さいをへたることなる、故なくてたへすくあしたまるへくもあらねは、是を世の人たやすからしす愁あへる樣ことはりにも過たり、されとかくいふかひなくて、御門より始たてまつりて、大臣公卿悉攝津國難波の京（福原ハ津ノ國ニカクハ記シタルカ）に移り、給ひぬ、をにつかふる程の人、誰かひとり故郷に殘りをしむ、つかさくらゐに思ひとかけ、主君のかけをたのむ程の人は、一日なりともとく移らむとはけみあへり、時をうしなひ、世にあまされて、期する所なき者は、愁なかしとまりをり、軒をあらそひし人のすまゐ、日を經つゝ荒行家はこほたれて、淀川にうかひ地は、目の前に畠となる、人の心皆あらたまりて、馬鞍をのみ重くす、牛車を用とする人なし、西南海の所領をのみねかひ、東北國の庄園をは好ます、（此間福原新都ノ記事ハ之ヲ略ス）日を經つゝ、世の中うき立て、人のこころもおさまらす、民の憂つひに空しからされは、同年の冬なほ此京にかへり給ひにき、されと毀ちわたさりし家ともは、いかになりけるにか、ことく〳〵くもとの樣にしも作らす、ほのかに傳へ聞くに、いにしへのかしこき御代には、憐みをもて國を治めたまふ、則御教に茅をふきて、軒をたにもとゝのへす、烟のともしきを見たまふときは、かきりある貢物をさへゆるされき、是民を惠み世をたすけ給ふによりてなり云々、

源平盛衰記ニ曰ク、治承四年五月廿九日、ニハ都遷アルヘキ由有其沙汰、來月三日福原ヘ行幸ト被定仰下ケリ、日比モ猿荒增ノ事アリト私語ケレ共、指モハヤト思ケル程ニ、既ニ被仰下ケレハ、京中ノ貴賤是非ニ迷ヒ、周章騷キツヽ、更ニウツヽトハ覺エス、兼テハ六月三日ト有披露シニ、俄ニ二日ニ被引上ケル間、供奉ノ人々上下周章騷テ、取物モ不取敢云々、二日ニ已ニ行幸アリ、人道ノ年來執シ通ヒ給ヒケル所ナルニ依テ也云々、新都行幸ノ供奉ニ參リケル人ノ、舊都ノ柱ニ書ツケタリケルハ、百年ヲヨカヘリ迄ニ過キコシニ愛宕ノ里ハ荒レヤ果テナム、何者ノ態ナリケルニヤ、東寺ノ門ノ道ハタニ札ヲ立タリ、咲出ル花ノ都ヲフリ捨テヽ風フク原ノ末ソアヤウキ、行幸ノ御門出ニイマイマシクソ見エシ、（此間新都ノ記事ヲ略ス）六月九日福原新都ノ事始アリ、（中略）先里内裏可被造進トテ、五條大納言邦綱卿ニ周防國ヲ給テ、六月廿三日ニ事始シテ、八月十日棟上被定申ケリ、彼大納言ハ大福長者ニテ御座ケレハ、造出サン事左右ニ及ネトモ、ソモ爭カ民ノ煩人ノ歎ナカルヘキ、（中略）新都ハ繁昌シテ人

屋軒ヲ並ケレ共舊城ハ只荒ニアレ行テ、適殘レル家家モ、門前草深メ、庭上露ミケシ、空キ跡ノミ多ケレハ、雉兎ノ栖カト成替、紫蘭ノ野邊トソマカヒケル太政入道ハ善事ニモ惡事ニモ思立ヌレハ、前後ヲモ顧ス、人ノ諫ヲモ用給フ、事ナシ、時々ハ物クルハシキ心地モアリケルニヤ、懸ル遷都マテモ思立給ケリ、中略舊都ニハ皇太后宮ノ大宮、諱多子、藤原公能ノ女、近衛帝ノ皇后、帝崩ス、尊號ヲ上リテ、皇太后ト曰フ、二條帝强テ之ヲ納ル、世ニ二代皇后ト稱ス、此時近衛河原第ニ在リ、今ノ出水ノ鴨川邊ナリ、八條中納言長方卿ハカリソ殘留給ヘル、長方卿ハ世ヲ恨ル事御座シテ供奉シ給ハス、只一人留給タリケレハ、京童部ハ留守ノ中納言トソ申ケル、中略去儘ニ目出カリシ都ナレ共、小路ニハ堀々切テ逆木ヲ引、車ナトノ通フヘキ樣モナシ、中略後德大寺ノ左大將實定ハ、舊都ノ月ヲ戀ワヒテ、入道ニ暇乞、都ヘ上給ケリ、中略サテモ都ニ入給、彼方此方ヲ見給ヘハ、空シキ跡ノミ多シテ、タマタマ殘ル門ノ内、行通人モ無レハ、淺茅カ原、蓬カ杣ト荒果テ、鳥ノ臥戸ト成ニケリ、八月半ノ事ナレハ、マタ宵ナカライツル月、主ナキ宿ニ獨住、折知カホニ鳴雁ノ、音サヘツラクソ聞召、大將ハイト、哀ニ堪スシテ、大宮ノ御所ニ參、中略大將ハ福原ノ都ノ住ウキ事語申テ被泣ケレハ、宮ハ平ノ京ノ荒行事仰出シテ、共ニ御涙ニ咽ハセ給ケリ、角テ夜モイタク深ケレハ、后宮ハ御琵琶ヲ搔寄サセ給テ、秋風樂ヲヒカセ給フ、侍從ハ琴ヲ彈ケリ、大將ハ腰ヨリ笛ヲ取出、是ヲ吹給、其後故郷ノ荒行悲サヲ、今樣ニ造リテ歌給フ、古キ都ヲ來テ見レハ、淺茅カ原トソ成ニケル、月光ハクマナクテ、秋風ノミソ身ニハ入ト三返歌ヒ給ケレハ、宮ヲ始進セテ御所中ニ候給ケル女房達折カラ哀ニ覺テ、皆袖ヲソ絞ケル、平家物語ハ大凡同シケレハ之ヲ記セス

續古事談に、六波羅の太政入道、清盛福原の京たてゝ、みなわたりゐて後、事のほかに程へて、古京と新京といつれかまされると云さためをせんとて、古京にのこり居たるさもある人とも、みなよひくたしけるに、人みな入道の心におそれて、思はかりもいひゝらかさりけり、長方卿ひとりすこしも所ををかす、この京をそしりて、ことはもおします散々に云へり、さてもとの京のよきやうをいひて、つひにその日の彼人のさために奉りて、古京へかへるへき儀になりにけり、のちに其座にありける上達部長方卿にあひて、さてもあさましかりし事かな、さはかりの惡人のいみしと思てたてたる京を、さ程にはいはれしそ、いひをもむけて、歸京の儀あれはこそいふかひもなく、はらたちなはいかゝし給はましと云けれは、此事我思には似さる儀也、入道の心にかなはむとてこそさはいひしか、其故はひろく漢家本朝をかんかふるに、よからぬ新儀をこなひたるもの、はしめに思たつおりは、なかく人に云あはする事な

し、そのしわさすこしくやしむ心ある時人には問也、これもかの京ことのほかに居つきて後、兩京のさためをおこなひしかは、はやこのことくやしうなりにけりといふことを知にき、されはなしかはことはをおしむへきとそいはれける、まことにも後に人に超られむとしける時も、此入道よきやうに申て、長方卿は事の外に物おほへたる人也、たやすく人に超越せしむへからすとて、後までも方人をせられけるなり、梅小路中納言の兩京のさためとて、其時人の口にありけり、

此等ノ記事ニ因テ之ヲ見レハ、福原遷都及ヒ平安還都ノ事情ヲ察スルニ足ルヘシ、然ルニ單ニ其事蹟ヲ見テ、而シテ未タ其意見ノ在ル所ヲ察セサルハ、能ク史ヲ讀ム者ト謂フヘカラス、夫レ清盛ノ法皇ヲ幽閉シ、公卿ヲ凌辱シ、急遽帝都ヲ遷セシハ、固ヨリ不可ナレト、其意見蓋シ別ニ在ルアルヘシ、世ニ清盛ヲ以テ、驕傲暴戾ノ人トナスハ、其末路ノ事實ニ因テ下セシ皮相ノ觀察ニシテ、深ク清盛ヲ知ル者ニアラス、想フニ清盛ハ有爲ノ人物ニシテ、蓋シ從來ノ委靡不振ヲ慨シ、大ニ振刷興起セントスルノ政略ヲ抱キシ者ト察セラル、決シテ從來武將ノ唯戰鬪武勇ヲ好ミシノ比ニアラス、然トモ無學不術、其榮貴ヲ極ムルニ及ヒ、知ラス知ラス藤原氏ノ爲ニ效ヒ、加フルニ兵力アルヲ以テ、蓋シ驕暴ニ陷リシノミ、故ニ其安藝守タル、又太宰大貳タルヤ、西國畧經ニ注意シ、音頭瀨戸ヲ開鑿シ、嚴嶋神社ヲ經營シ、遂ニ輪田御崎ニ築キ、兵庫ノ良港ヲ造リ、鎮西ノ交通、万世ソノ利ニ賴レリ、且ツ屢宋國ニ交通シ、未タ正使ノ往來ヲ復セサルモ、已ニ通商貿易ノ道ヲ開キ、大ニ爲ス所アラント欲ス、故ニ福原ヲ以テ其別業トシ、盛ンニ館舍ヲ築キ、以テ西國經略ノ基ト爲セリ、後白河法皇モ屢福原ニ御幸アリ、宋船ノ來リシ時ノ如キハ、特ニ御幸叡覽アリシコトアリ、又清盛ハ宋人齎ス所ノ太平御覽ヲ奉獻セシコトアリ、其意ヲ察スルニ、鎮西ヲ經略シ、宋國ニ交通シ、大ニ從來ノ恬熙愉怠ノ風ヲ一洗シ、進取ノ政略ヲ行ハント欲スルニアルヲ知ルヘシ、恨ムル所ハ、補佐其人ヲ得ス、且時機已ニ後レ、其志ヲ行フ能ハス、忽卒舊都ニ復シ、內外困難、終ニ恨ヲ齎シテ沒セシノミ、然ルニ議者南都北嶺ノ僧兵ニ苦メラレ、又源氏ノ逼ルヲ恐レ、遽ニ之ヲ避ケテ遷リシトナスハ、未タ深ク考ヘサルノ論ト謂フヘシ、前段ノ記事ニツキ、細ニ之ヲ考フル時ハ、其事實自ヲ明ナラン、平氏末路ニ屬スト雖トモ、其東大興福二寺ヲ燒キ、園城寺ヲ挫ク、一裨將ノ力ノミ、何必ス之ヲ恐レテ都ヲ遷サンヤ、又諸源ノ興ルヲ聞キテ之ヲ避ケシト謂フハ尤モ不可ナリ、遷都ハ六月二日ナリ、諸源ノ興リシハ八月ニテ、其征討ノ師ヲ發セシハ福原ニ於テセリ、其敗績ニ及テ更ニ舊都ニ還リシヲ以テモ、之ヲ恐レ

シニ非サルヲ證スヘシ、夫レ平安福原ハ二日程ノミ、山河ノ隔險阻ノ阨アルニアラス、所謂我能往、仇亦能往ナルノミ、尋常ノ人尚且之ヲ知ル、況ヤ清盛ノ雄才ヲヤ、是レ以テ其事實ヲ辯シ、千歲ノ寃ヲ雪カサルヘカラサル所以ナリ、

源義仲

以仁王平氏ヲ討ツノ令旨ヲ傳フルヤ、諸國ノ源氏皆兵ヲ起ス、賴朝ハ伊豆ニ起リ、義仲ハ信濃ニ起ル、義仲小字ハ駒王丸、爲義ノ孫ナリ、父ハ春宮帶刀義賢ト曰フ、姪義平ノ爲ニ殺サル、義仲時ニ年甫テ二歲ナリ、義平畠山重能ニ囑シテ捕殺セシム、重能其孤弱ナルヲ憫ミ、密ニ之ヲ齋藤實盛ニ托ス、實盛之ヲ義仲乳母夫信濃權守中原兼遠ニ托ス、兼遠意ヲ傾ケ鞠養シ、木曾山中ニ居ラシム、義仲軀幹魁偉、膂力絕倫、心深ク家門ノ衰弊ヲ痛ミ、京都ニ往來シテ、平氏ヲ伺察ス、賴朝ノ石橋山ニ戰フヤ、起キ援ケント欲ス、會平氏ノ黨來リ攻ム、戰テ之ヲ走ラス、宗盛先ツ義仲ヲ滅セント欲シ、城長茂ニ命シテ之ヲ擊タシム、義仲迎戰テ大ニ之ヲ破ル、進テ國府ニ入ル、勢大ニ振フ、延曆寺僧永雲顯眞以仁王ノ子ヲ義仲ニ托ス、義仲宮ヲ越中ノ宮崎ニ造リ之ヲ奉ス、北陸宮ト号ス、宗盛平維盛ヲ以テ大將トシ、大擧シテ來リ擊ツ、義仲迎戰皆勝ツ、書記覺明ヲシテ牒ヲ延曆寺ニ移サシメ、進テ近江蒲生ニ至ル、京都大ニ駭ク、宗盛佐々木莊ヲ日吉社ニ寄テ、山僧ノ意ヲ悅ハシメントス、應セス、火ヲ山上ニ擧ケ以テ義仲ヲ迎フ、義仲望ミ見テ大ニ悅ヒ、湖ヲ濟リ比叡山ニ登ル、平氏膽ヲ喪フ、宗盛安德帝ヲ奉シテ西海ニ走ル、義仲京ニ入ル、詔シテ第ヲ京師ニ賜フ、法皇功ヲ論シテ、賴朝ヲ第一ト爲シ、義仲ヲ第二ト爲ス、從五位下ニ叙シ、左馬頭ニ任シ、越後守ト爲ス、義仲悅ハス、改メテ伊豫守ニ任ス、法皇京師主ナキヲ以テ、立ツル所ヲ議ス、此時立ツヘキ者、高倉帝第二皇子ト、北陸宮トアリ、義仲北陸宮ヲ立テント欲シ之ヲ奏ス、法皇意ヲ第二皇子ニ屬ス、依テ旨ヲ義仲ニ喩ス、義仲奏シテ曰ク、高倉宮陛下ノ憂辱ヲ哀ミ、宗社ノ危急ヲ慨シ、義ヲ天下ニ唱フ、不幸敗死スト雖トモ、今日ノ功ヲ致スハ、實ニ宮ノ力ナリ、北陸宮ハ其胤子ナリ、豈之ヲ棄テヽ他ニ求ムヘケンヤト、法皇聽カス、神祇官陰陽寮ニ勅シ之ヲトセシム、三宮吉ナリ、從ハス、更ニトス、四宮吉ナリ、之ヲ立ツ、是レ後鳥羽帝ナリ、義仲懌ハス、曰ク、功ト年トヲ以テスレハ、北陸宮ナリ、トヲ以テスレハ三宮ナリ、然ルニ今此ノ如シ、我高倉宮ヲ痛恨スト、此ヨリ大ニ怨望ヲ抱キ、兵ヲ放テ民家ヲ掠略ス、京都騷然タリ、法皇將ニ賴朝ヲ召サントス、義仲益、恐ル、法皇義仲ニ命シ、平氏ヲ討タシム、義仲京師ヲ發ス、已ニシテ賴朝弟範賴義經ヲシテ來リ伐タシムト聞キ、乃チ還ル、法皇使ヲ遣リ之ヲ止ム、詔ヲ奉セス、義仲竊ニ法皇ヲ奉シ、北國ニ赴カントス、事漏ル、法皇驚キ、人ヲ遣リ之ヲ責

ム、是ニ於テ猜疑益甚シ、法皇又撿非違使平知康ヲ遣リ之ヲ責ム、知康善ク鼓ヲ擊ツ、鼓判官ト稱ス、義仲見テ之ヲ嘲ケル、知康忿恚、法皇ニ勸メテ義仲ヲ討タシム、法皇園城寺僧兵ヲ召シ、御所法住寺殿ヲ守ラシメ、知康ヲ以テ軍事ヲ督ス、義仲怒テ曰ク、吾レ首トシテ義擧ニ應シ、逆臣ヲ西海ニ攘フ、功アリ罪ナシ、何ソ俄ニ誅セラルヽヤ、我五万衆ヲ擁シ京師ヲ護ル、官芻糧ヲ給セス、若シ掠取セスンハ、何ヲ以テ士卒ヲ養ハンヤ、是レ彼ノ鼓判官カ讒ニヨルノミ、後ルレハ人ニ制セラレン、速ニ發スルニ若カスト、十一月十九日兵ヲ分テ七隊トナシ、法住寺御所ヲ圍ム、義仲自ラ七條ノ末、大和大路ノ西門ト北門ヲ攻メ、楯親忠ヲシテ八條ノ西門ヲ攻メシメ、今井兼平ヲシテ宮東ノ瓦坂ニ要セシム、兵僅ニ千餘人、（此時平氏ヲ伐ク爲ニ、其兵ヲ西ニ下セシヲ以テナリ、）知康恐怖戰フ能ハス、先遁ル、義仲命シテ火ヲ北面ノ民家ニ放ツ、官兵大ニ敗レ走ル、法皇輿ニ御シ、南門ヨリ去ル、亂兵追射ス、官兵散走ス、少將宗長急裝輿ニ侍シ、叱シテ曰ク是法皇ナリ、無禮ナル勿レト、親忠之ヲ聞キ馬ヨリ下リ、其弟八島行綱ト法皇ヲ車ニ奉シ、之ヲ五條內裏ニ移ス、從フ者宗長一人ノミ、兵火益熾ンナリ、帝遁ルヽ所ナシ、侍從信清紀伊守範久、帝ヲ小舟ニ奉シ、園內ノ池中ニ避ク、矢降ル雨ノ如シ、信清大聲之ヲ叱シ、帝ヲ舟底ニ匿シ僅ニ免カレ、夜ニ入リ密ニ坊城殿ニ移シ、更ニ閑院內裏ニ御ス、天台座主明雲（法皇ノ皇子）園城寺長吏八條宮皆亂兵ノ爲ニ射殺セラル、刑部卿賴輔衣裳ヲ剝カル、其奮戰死ヲ致ス者、僅ニ伯耆守源光長其子判官光恒數人ノミ、法住寺殿ハ、法皇多年經營アリシ宮殿堂塔ナリシカ、一時灰燼トナレリ、廿日朝義仲兵ヲ六條河原ニ整ヘ、獲ル所ノ首四百四十餘級ヲ撿シ、凱歌ヲ奏ス、是ヲ法住寺ノ亂ト曰フ、賴朝之ヲ聞キ、大ニ兵ヲ發シテ之ヲ討ツ、東兵漸ク逼ル、義仲兵ヲ分チ宇治勢多ニ禦カシム、兵敗レテ還ル、義仲法皇ヲ挾ンテ走ラント欲シ、御所ニ至ル、門闔テ入ル能ハス、俄ニ東軍來リ逼ル、乃チ百餘騎ヲ率テ出ツ、散兵ヲ斂メ三百餘騎ヲ得タリ、東兵七條八條法住寺柳原ニ塡滿ス、義仲衝突縱橫、轉鬪シテ進ミ、義經ノ爲メニ破ラル、走テ粟津ニ至リ矢ニ中テ死ス、子義高モ亦賴朝ノ爲メニ殺サル、初メ義仲ノ兵ヲ擧ル、其意宗黨ノ爲メニ讐ヲ復スルニ在リ、是ヲ以テ賴朝ヲ石橋山ニ援ケント欲シ、行家ノ來托スルニ及テ、厚ク之ヲ庇ス、賴朝怒レトモ顧ミス、兵ヲ率ヰ臼井坂ニ至ルヤ、諸將之ヲ拒カント欲ス、義仲曰ク、我宗族動モスレハ相魚肉シテ笑ヲ取レリ、我暫ク之ヲ避ケント、乃チ之ヲ越後ニ避ケ、其子義高ヲ質トシテ之ト和ス、諸將ノ妻ヲ召シテ曰ク、吾賴朝ト絕タハ、是レ汝夫ヲ死地ニ駈ルナリ、故ニ吾兒ヲシテ之ニ代ラシムト、其大統ヲ議スルニ及ヒテ、北陸宮ヲ立テ以仁王カ唱義ノ勳ヲ表セントスト欲ス、其識見超邁仁アリ勇アリ、後ノ狂悖ト、宛モ

二人ノ如シ、惜哉不學無術ナルト、輔佐其人ナキトヲ以テ遂ニ此ニ至ラシムルコトヲ、（源平盛衰記、大日本史、玉海、）

法住寺殿ハ本ト太政大臣藤原爲光ノ建立ナリ、故ニ爲光ヲ法住寺大臣ト稱ス、後白河法皇大ニ之ヲ廣メ、宮殿伽藍其內ニ相連リ、池ヲ鑿リ山ヲ築キ、更ニ日吉熊野ノ神社ヲ勸請シ、以テ院ノ御所トナス、今ノ蓮華王院卽チ三十三間堂モ、其中ニアル一堂ナリ、其區域ハ、七條ヨリ八條ニ至リ、大和大路ヲ前ニシテ、今熊野ヲ後ニセリ、今法皇山陵ノ在ル所モ、卽チ其地ニシテ、池田町ハ御庭ノ池ノ跡ナリ、義仲ノ亂ヲナスヤ、兵ヲ七隊トナシ、自ヲ大和大路ノ北門ト、七條末ノ北門ヲ攻メ、楯親忠ニ八條ノ西門ヲ攻メシメ、今井兼平ニハ回リテ其背後ナル瓦坂ヲ要セシメタリ、北風ニ乘シ火ヲ放ツ、官兵敗レ走ル、南門ハ敵ナキヲ以テ、法皇ハ此ヨリ出御アリシカ、親忠ハ八條ノ西門ヲ攻ムルヲ以テ、之ヲ見テ五條內裏ニ奉セシナリ、明雲八條宮其他遁走ノ人ハ、皆南門ヨリ出テシモノヽ如シ、帝ハ池中ノ小舟ニ隱レテ、僅ニ免ルヲ得タリ、此池ハ廣大ナリシモノト見エテ、數十年後マテハ、猶少シク遺レリト云フ、今池田町ノ東、今熊野ノ下ノ田面ハ其跡ナリ、

源義經

源義經ハ義朝ノ子ニシテ、幼名牛若ト曰フ、已ニ宥メラレテ、鞍馬寺ノ徒弟トナル、年甫テ十一、適諸家ノ系譜ヲ閱シ、慨然トシテ家ヲ興スノ志アリ、承安四年陸奥ニ之キ、藤原秀衡ニ依ル、秀衡厚ク之ヲ遇ス、（源平盛衰記、平家物語、）治承四年、兄賴朝兵ヲ東國ニ起シ、黃瀨川ニ次ス、義經乃チ秀衡ト謀リ往テ會ス、賴朝大ニ喜ヒ、之ヲ義家義光ノ際會ニ比ス、既ニシテ木曾義仲兵ヲ擧ケテ先ツ京師ニ入リ、勢威大ニ振フ、時ニ平氏西海ニ在リ、賴朝東國ニ在リ、天下殆ト三分ノ勢アリ、（東鑑、玉海、壽永雜取、）三年正月、賴朝弟範賴及義經ヲシテ義仲ヲ討タシム、範賴勢多ニ向ヒ、義經宇治ニ向フ、義仲今井兼平、根井行親等ヲシテ、宇治勢多ノ二橋ヲ撤シテ拒キ守ラシム、義經進テ宇治ヲ破ル、義仲ノ軍大ニ敗レ、走リテ粟津ニ死ス、義經先ツ京ニ入リ六條殿ニ至リ、後白河上皇ニ謁ス、上皇之ヲ壯トス、二月一ノ谷ヲ陷レ、平重衡ヲ擒シ、通盛、忠度、知章、敦盛等ヲ斬リ、首ヲ京師ニ梟ス、八月左衞門少尉ニ任シ檢非違使判官ニ補ス、是ヨリ先キ義經賴朝ニ就キ、奏シテ一官ニ補セラレンコトヲ求ム、賴朝之ヲ惡ミ、抑ヘテ奏セス、獨リ範賴ヲ奏シテ三河守ニ任ス、是ニ至リ義經使ヲ遣ハシ、告クルニ朝命ヲ以テス、賴朝之ヲ疑ヒ懌ハス（東鑑）尋テ從五位下ニ叙シ、院ノ昇殿ヲ聽ルサル、（源平盛衰記、義經長申次記、）四年三月、義經平氏ヲ壇浦ニ殲シ、四月神器ヲ奉シ、平宗盛、時忠、清宗等ヲ以テ、京師ニ凱旋ス、法皇大ニ喜ヒ、上下其功

ヲ稱ス、（玉海、源平盛衰記、）梶原景時義經ニ西海ニ從ヒ、事ヲ以テ屢義經ヲ恨ム、乃チ窃ニ書ヲ鎌倉ニ飛ハシ之ヲ讒ス、賴朝益〻義經ヲ惡ム、五月、義經平氏ノ俘虜ヲ鎌倉ニ押送ス、賴朝俘虜ヲ受ケ、義經ヲ腰越驛ニ留ム、義經憂悶、書ヲ裁シテ辯疏シ、大江廣元ニ依テ之ヲ賴朝ニ呈ス、廣元抑ヘテ通セス、（東鑑）六月、賴朝義經ヲシテ俘虜ヲ監シテ京師ニ還ラシム、義經怏々トシテ去ル、賴朝怒リ、其采地ヲ收ム、時ニ源行家賴朝ト協ハス、匿レテ京師ニ居ル、賴朝益〻之ヲ疑ヒ、梶原景季ヲ京師ニ遣ハシ狀ヲ調ハシム、景季還リ、其父景時ト共ニ之ヲ讒ス、賴朝之ヲ信シ、能ク義經ヲ殺スモノヲ募ル、諸將恐レテ應スル者ナシ、土佐坊昌俊奮テ曰ク、請フ十日ヲ限リテ功ヲ奏セント、賴朝乃チ昌俊ヲシテ之ヲ圖ラシム、義經賴朝ノ謀ヲ知リ、法皇ノ宮ニ詣リ奏シテ曰ク、臣カ兄賴朝臣ニ命シテ行家ヲ殺サシム、行家ハ臣カ叔父ナリ、又罪惡ナシ、豈殺スヘケンヤ、且ツ臣平氏ヲ殄滅シ、禍亂ヲ戡定ス、功大ナラストセス、而シテ賴朝之ヲ賞セス、却テ臣カ邑ヲ奪ヒ、又臣ヲ除カントス、臣行家ト謀ヲ協セ之ヲ禦カントス、蓋クハ賴朝ヲ討ツノ院宣ヲ賜ヘト、法皇公卿ナシテ之ヲ議セシム、事未タ決セス、九月十七日、昌俊京師ニ入ル、義經召シテ之ヲ問フ、昌俊他ナキヲ陳シ、誓テ去ル、即夜兵八十三人ヲ率ヰ、義經ノ堀川六條ノ第ヲ襲フ、（第ハ源氏世襲ノ地ニシテ、今堀川六條本國寺ノ東ニ當ル、）義經乃チ門ヲ開ラキ、帳下七騎ト奮鬪之ヲ禦ク、行家變ヲ聞キテ來リ援ク、昌俊敗走シ、鞍馬山ニ匿ル、山僧義經ト舊アリ、縛シテ之ヲ堀川ノ第ニ送ル、義經自カラ之ヲ鞫ス、屈セス、命シテ六條河原ニ斬ル、（東鑑、源平盛衰記、）義經直チニ法皇ノ宮ニ詣リ、逼リテ賴朝ヲ討ツノ宣旨ヲ請フ、左大臣藤原經宗曰ク、義經若シ暴ヲ肆ニセハ、誰カ能ク之ヲ禦カン、若カス姑ク請ヲ許シ然後之ヲ賴朝ニ告ケンニハ、賴朝必スシモ深ク怨マサルヘシ、右大臣藤原兼實固ク以テ不可ト爲ス、法皇聽カス、遂ニ藏人頭藤原光雅ヲシテ賴朝ヲ討ツノ院宣ヲ賜ハシム、（玉海）報鎌倉ニ至ル、賴朝親ラ兵ヲ率ヰテ鎌倉ヲ發ス、義經之ヲ聞キ、將ニ西海ニ奔ラントス、或ハ云フ、義經法皇及公卿ヲ挾ミ去ラントス、人心恟々タリ、十一月三日、義經行家ト俱ニ法皇宮ニ詣リ、辭別シテ京師ヲ出ツ、義經ノ京師ニ在ルヤ、循謹ヲ以テ上ヲ奉シ、威嚴以テ下ヲ戢ム、去ルニ及ヒ秋毫侵スナク、京都帖然タリ、藤原兼實之ヲ稱シ曰ク、院中及諸家京中悉ク以テ安穩、是義經之所行、實可謂義士ト、又曰ク、武勇與仁義、殆後代之佳名歟、可謂美ト、義經西海ニ奔ラントシ、大物浦ニテ大風ニ遭ヒ、轉シテ大和ニ入リ、吉野山ニ匿レ、衆徒ノ逐フ所トナリ、陸奥ニ奔リ、藤原秀衡ニ依ル、時ニ元暦三年ナリ、已ニシテ秀衡卒ス、其子泰衡ニ遺命シ、國ヲ擧ケテ義經ニ聽カシム、五年二月、賴朝之ヲ聽キ、泰衡ヲ討ツヲ請フ、泰衡恐ル、閏四月兵ヲ起シ、衣川ノ館ヲ襲フ、義經妻河越氏及其女

ヲ殺シテ自殺ス、時ニ年三十一、六月泰衡使ヲ遣ハシ、義經ノ首ヲ鎌倉ニ送ル、時人之ヲ憐ム、東鑑義經天資精悍、勇武善ク兵ヲ用ユ、木曾ヲ滅シ、平氏ヲ殲シ、其功最モ大ナリ、然ニ賴朝ノ忌ム所トナリ、其終ヲ保ツコト能ハス、哀ムヘシ、初メ義經ノ京師ヲ去ルヤ、法皇賴朝ヲ恐レ、俄ニ院宣ヲ下シ義經行家ヲ捕ヘシム、賴朝法皇ノ己ヲ討スルノ院宣ヲ義經ニ賜ヒシヲ機トシ、權謀ヲ以テ法皇ヲ要シ、遂ニ大政ヲ攘ム、是レ賴朝カ義經ノ功ヲ忌ミテ之ヲ殺スノミナラス、竟ニ之ヲ籍テ大ニ其志ヲ成スニ至レリ、事ハ別章ニ詳ナリ、後賴朝南都僧聖佛カ義經ヲ隱庇セシト聞キ、鎌倉ニ致シテ之ヲ鞫ス、東鑑其言ヲ記スルヲ見ルニ、最モ明快ニシテ、以テ此事ノ論斷ニ充ツヘシ、宜ナル哉賴朝ノ忸怩トシテ怒ルアタハサルナリ、因テ之ヲ左ニ揭ク

八日庚戌、南都周防得業聖佛依召參向、爲豫州師檀之故也、日者小山七郎朝光預置之、今日二品有御對面、直及御問答、仰曰、豫州者欲濫邦國之凶臣也、而逐電之後、搜求諸國山澤、可誅戮之間、度々被宣下畢、然者天下尊卑背彼之處、貴房致祈禱、剩有同意結搆之間、其企如何者、聖佛答申云、豫州爲君御使、征平家、刻合戰屬無爲之樣、可廻祈禱之旨、慇懃契約之間、年來抽丹誠、非報國志乎、茲豫州稱蒙關東譴責、逐電之時、以謂師檀之好、來南都之間、相構先遁、一且害退、可被謝申于二品之由、加諷詞、相副下法師等、送伊賀國畢、其後全不通音信、謂祈請不祈謀叛、謂諷詞和逆心畢、彼何被處與同哉、凡倩案關東安全、只在豫州武功歟、而聞食讒訐、忽忘奉公、被召返恩賞地之時、發退心之條、人間所堪可然事歟、速翻日來御氣色、就和平之儀、被召還豫州兄弟、令成魚水思給者、可爲治國之謀也、申狀更非引級之篇、所求天下靜謐之術也、

賴朝上洛

平氏ノ滅フルヤ、源義經留テ京師ヲ守護ス、兄賴朝ト隙アリ、朝廷ニ迫リ、賴朝追討ノ宣旨ヲ請フ、法皇已ムヲ得ス院宣ヲ下ス、賴朝之ヲ聞キ大ニ怒リ、將ニ兵ヲ發シテ西上セントシ、玉海、源平盛衰記、文治元年十一月、黃瀨川ニ至リ、義經叔父行家ト西奔スルヲ聞テ引還ル、尋テ大和守重弘、一品房昌寛、黃瀨川ヨリ上洛シ、賴朝忿怒ノ狀ヲ奏ス、朝廷大ニ驚キ、猝ニ院宣ヲ諸國ニ下シテ行家義經ヲ搜捕セシム、東鑑是ヨリ先法皇大藏卿藤原泰經ヲシテ右大臣藤原兼實ニ諮ハシメ、賴朝ニ諭スニ義經ニ宣旨ヲ與ヘシハ、皆已ムヲ得サルニ出ツルヲ以テセントス、兼實對フルニ既ニ晩キヲ以テス、玉葉是ニ於テ朝廷大ニ懼ル、賴朝之ヲ機トシ、北條時政ヲシテ兵ヲ以テ京師ニ入リ之ヲ鎭シ、且奏請セシメテ曰ク、行家義經逃竄ス、搜捕甚タ難シ、諸國ニ守護ヲ置キ、莊園ニ地頭ヲ置キ、所在ニ就キ擒獲セハ、勞セス

シテ自ラ定ラン、其兵糧ノ如キハ、五畿四道二十六國ニ段別米五升ヲ課シテ之ニ充テント、法皇心ニ之ヲ難ンス、時ニ公卿皆頼朝ノ意ニ違ハンコトヲ憚ル、法皇已ヲ得ス、遂ニ之ヲ聽ス、頼朝乃ヶ其家臣ヲ以テ諸國守護地頭ニ充ツ、此ニ於テ國司ノ權守護ニ移リ、領家皆其地ヲ喪フ、頼朝更ニ朝政ニ干渉シ、己ノ與黨ヲ以テ朝廷ノ要路ニ居ラシメント欲ス、乃ヶ法皇ニ奏請シテ議奏ノ公卿ヲ置キ、右大臣藤原兼實、内大臣藤原師家等十人ヲ以テ之ニ充ツ、又權右中辨藤原光長源兼忠ヲ藏人頭ニ補シ、權中納言藤原朝方ヲ院御廚別當ニ復シ、伯耆守藤原宗頼ヲ大藏卿ト爲シ、參議親宗以下數人義經ニ黨スルヲ以テ職ヲ免シ、大藏卿泰經、刑部卿頼經ヲ流ス、公卿ノ黜陟其意ノ如クナラサルナシ、二年三月奏シテ治承以來兵革屢起リ、民繇役ニ苦ムヲ以テ、關東九國ノ逋租ヲ蠲キ、今年ヨリ民力ヲ量較シテ收納シ、且ツ諸國ノ賦稅一切之ニ準シ、以テ民ヲ安センコトヲ請フ、尋テ北條時定留リテ京師ヲ警衛ス、頼朝妹夫左馬頭藤原能保ヲシテ之ヲ助ケシム、東鑑　後中原親能ヲ以テ之ニ代フ、帝王編年記　三年六月、頼朝大江廣元ヲ京師ニ遣ハシ閑院内裏ヲ繕治セシム、尋テ京師盜多ク所在ヲ劫略スルヲ以テ、千葉常胤、下河邊行平ヲ遣ハシ之ヲ捕治セシム、東鑑　五年正月、頼朝正二位ニ叙セラル、公卿補任　三月大内ヲ修ム、是ヨリ先義經遁レテ藤原泰衡ニ倚ル、頼朝泰衡ニ命シテ之ヲ殺シ、尋テ泰衡ヲ滅サントト欲シ、累奏已マス、朝廷未タ之ヲ聽サス、是ニ於テ頼朝敕ヲ待タス、恣ニ兵ヲ發シ遂ニ奥羽二州ヲ平定ス、建久元年十一月ニ至リ、頼朝始テ上洛ス、七日京師ニ至リ、六波羅ノ第ニ入リ、東鑑ノ注ニ、故池大納言頼盛卿舊跡、此間被建之トアリテ、今六波羅密寺ノ西ニ當レリ、騎從ノ盛ナルコト前後比ナシ、法皇密ニ車ヲ立テ之ヲ見ル、東鑑　初メ平氏西海ニ奔竄シ、義仲驕恣甚キニ當リテ、法皇頼朝ニ頼ラント欲シ之ヲ召ス、頼朝二弟ヲシテ西上セシメ、義仲及ヒ平氏ヲ滅シ天下略定マルヤ、朝廷其ノ功ヲ賞シテ正二位ニ叙スト雖モ、五年ノ久キ入朝恩ヲ謝セス、是ニ至リ義經泰衡ヲ滅シ、復顧慮スル所ナキヲ以テ始テ入朝ス、源平盛衰記、東鑑大意、　九日先ツ法皇六條殿ニ謁シ、後天皇ニ閑院内裏ニ朝ス、即日權大納言ニ任セラレ右近衛大將ヲ兼ヌ、十二月上表シテ両職ヲ辭ス、法皇特ニ優遇シ大功田一百町ヲ賜ヒ、又其家臣十人ニ衛府ノ官ヲ授ク、十二月鎌倉ニ歸リ、藤原能保ノ子高能ヲシテ六波羅ヲ守ラシメ以テ朝廷ヲ制ス、是ヨリ紀綱大ニ弛フ、東鑑、玉海、神皇正統記參取、　追捕使ハ群盜ヲ追捕スル爲ニ臨時之ヲ置クコトアリ、朝野群載　此ニ及ヒ頼朝亦家臣ヲ以テ追捕使ト爲シ、近畿諸國ヲ按檢セシメシカ、遂ニ自ラ天下總追捕使タランコトヲ請フ、廷議之ヲ許ス、增鏡、保暦間記、　是ヨリ兵馬刑政ノ權悉ク頼朝ニ歸シ、朝廷大ニ衰ヘ、天下ノ大勢此ニ一變ス、

平安ノ著姓、藤原氏ニ亞クモノハ清和源氏トス、世々武臣トナリ、宗支天下ニ遍ネク、鎌倉室町江戸ノ幕府皆其胤ナリ、因テ其略系ヲ此ニ掲ケ以テ其大概ヲ示ス、

清和源氏略系

- 貞純親王　清和天皇皇子　四品號桃園
  - 經基王　始賜源姓　號六孫王
    - 滿仲　號多田　鎮守府將軍
      - 頼光　正四位下左兵衛尉
        - 頼信　鎮守府將軍
          - 頼義　從四位下一條院判官代
            - 義家　號八幡太郎　鎮守府將軍
              - 義親　從五位上對馬守
                - 義國　從五位下帶刀長
                - 義忠
              - 義綱　號賀茂二郎ノ左衛門尉
              - 義光　號新羅三郎　左衛門尉
              - 爲義　左衛門尉
              - 義朝　從四位下左馬頭
              - 義賢　帶刀長
              - 頼賢
              - 爲朝
              - 行家
              - 頼家　征夷大將軍
              - 實朝　征夷大將軍
              - 義重　新田氏祖　從五位下左衛門尉
              - 義康　足利氏祖　從五位下左衛門尉
                義康子曰義兼自義兼經義氏泰氏頼氏家時貞氏至尊氏
              - 尊氏　征夷將軍　以下下ニ記ス
              - 義季　德川氏祖　德川四郎
                義季子曰有親經親氏泰親信光親忠長親信忠清康廣
              - 義平　左衛門少尉　號惡源太
              - 頼朝　正二位征夷大將軍
              - 範頼　從五位下三河守
              - 義經　從五位下伊豫守
              - 義乗　新田二郎　皇嘉門院藏人
                義乗子曰義房自義房經政義政氏基氏朝氏至義貞
              - 義貞　正四位下左中將
              - 義顯　越後守
              - 義興　正五位下左兵衛佐
              - 義宗　左少將
              - 義助　正五位下兵庫助

忠至家康

家康　征夷大將軍　東照公

秀忠　征夷大將軍　左大臣

家光　征夷大將軍　右大臣

子孫世々將軍ニ任シ慶應三年ニ及ヒ將軍慶喜大政ヲ奉還ス

義治　左兵衛佐

藤原兼實

藤原兼實ハ關白忠通ノ子ナリ、忠通四子アリ、長ヲ基實、次ヲ基房、三ヲ兼實、四ヲ兼房ト云フ、（琴中分脉）兼實最モ才學ヲ以テ著ハル、仁安中、基實父ニ繼テ攝政ト爲リ、薨スルニ及ヒ、弟基房之ニ代ル、平清盛基實ト姻アリ、事ヲ以テ基房ヲ怨ミ、基實ノ子基通ヲシテ之ニ代ラシム、基通時ニ年甫メテ二十、才學兼實ニ比スヘカラス、兼實意平ナラス、職事奉行源通親ヲ罵リ、平氏ニ諛ヒ朝憲ヲ亂ルトナス、（玉海、愚管抄）兼實博ク典故ニ通ス、朝廷疑議アル毎ニ數々諮詢ス、治承四年、平清盛都ヲ福原ニ遷ス、宮殿未タ定マラス、而シテ大嘗祭廢ス可ラス、上皇大禮ノ稽緩スルヲ憂ヒ、兼實ヲ召シテ之ヲ問フ、兼實對フルニ暫ク舊都ニ還リ、祭祀ヲ修メ然後徐カニ宮城ヲ議スヘキヲ以テス、上皇乃チ大嘗ヲ停ム、平氏ノ安德天皇及神器ヲ挾ミテ西海ニ走ルヤ、京師主ナシ、兼實上言シテ天下一日モ主ナカルヘカラサル所以ヲ陳ス、法皇之ヲ聽キ、遂ニ後鳥羽天皇ヲ立ツ、文治元年、源義經宣旨ヲ賜リテ賴朝ヲ討タントヲ乞フ、法皇人ヲシテ之ヲ兼實ニ諮ハシム、兼實對テ曰ク、追討ノ宣旨ハ宜ク愼重スヘキ所ニシテ、罪八虐ヲ犯スニ非レハ、未タ嘗テ輕シク下サス、今賴朝ノ犯ス所、未タ此ニ至ラス、曩ニハ清盛義仲ノ賴朝ヲ討スルヲ請フヤ、皆宣旨ヲ賜フ、本叡慮ニアラスシテ、已ヲ得サルニ出ルナリ、而シテ援亂ノ已マサル職トシテ之ニ由レリ、今豈ニ復其轍ヲ履ムヘケンヤト、又曰ク、若シ義經ノ請ヲ允サスシテ、或ハ不測ノ禍アランコトヲ慮ラハ、宜シク使ヲ鎌倉ニ遣ハシ、賴朝ニ敕シテ曰フヘシ、義經若シ罪狀アラハ、之ヲ鎌倉ニ致シ審問スヘシ、妄ニ闕下ヲ騷擾セシムルコトナカレト、勅諭斯ノ如クニシテ、賴朝命ヲ奉セサレハ須ク違勅ヲ名トシテ宣旨ヲ義經ニ下スヘシト、而シテ其言行ハレス、義經既ニ敗ルヽニ及ヒ、賴朝其事ヲ名トシ、朝廷ニ逼リテ、公卿以下其事ニ關スル者ヲ斥ケ、議奏公卿十人ヲ定メ、兼實ヲ以ツテ其首ニ置キ、內覽ヲ授ケンコトヲ請フ、法皇兼實ノ賴朝ヲシテ已ヲ薦メシムルヲ疑フ、兼實內覽ノ置クヘカラサル所以ヲ奏シ、自ラ之ヲ辭ス、法皇聽カス、兼實既ニ內覽ヲ奉ス、攝政基通ト俱ニ大

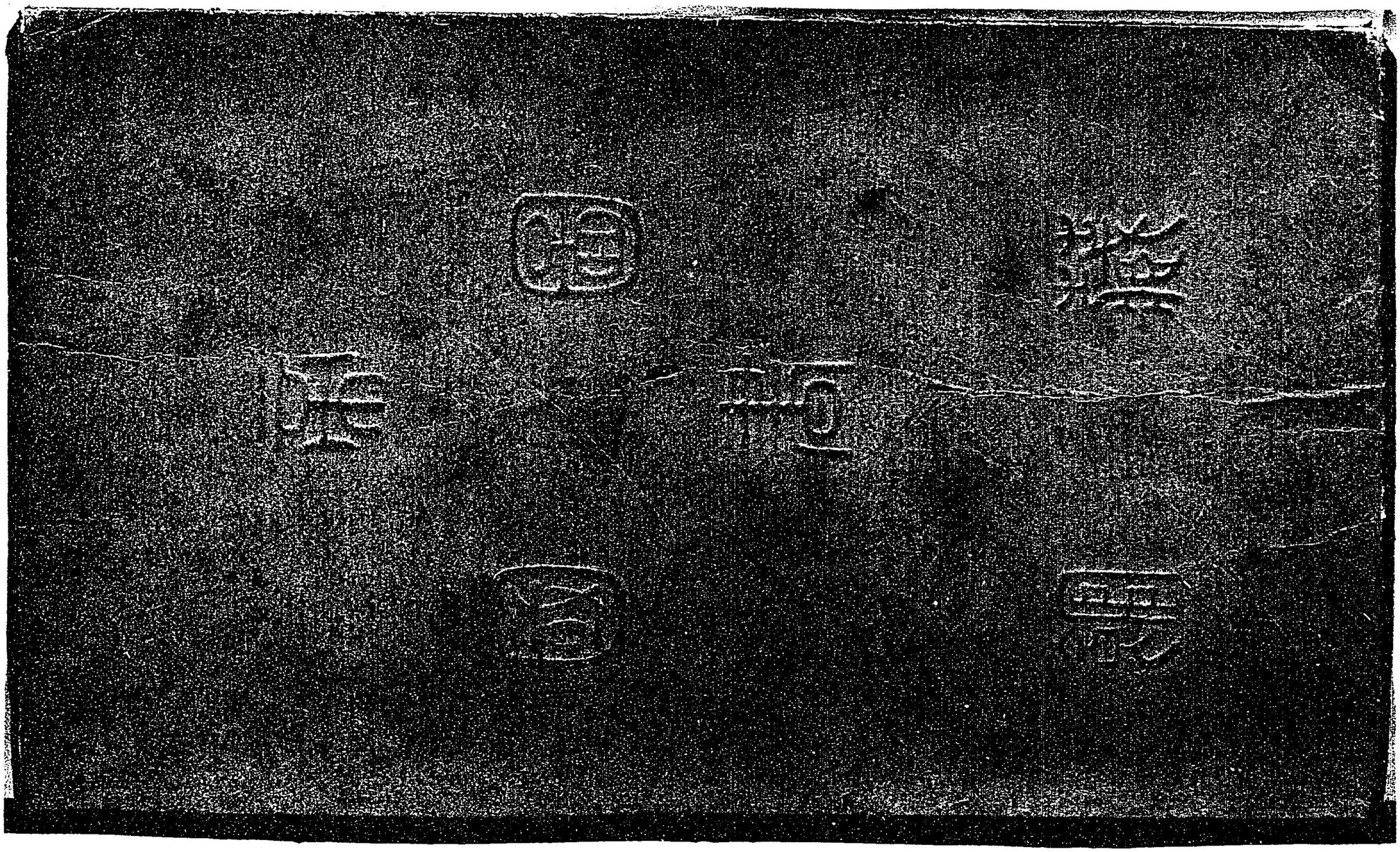
政ヲ決ス、而シテ譽望基通ノ上ニ出ツ、法皇素ト兼實ヲ喜ハス、猜疑益甚シ、兼實自ヲ安セス、因テ法皇ノ愛姫丹波局ヲ見、自陳スルコトヲ求ム、得ルコト能ハス、賴朝奏シテ兼實ヲ攝政ニ薦メ、且ツ曰ク、臣兼實ニ私スルニ非ス、兼實亦臣カ汲引ヲ冀フニ非ス、衆望ノ歸スル所、實ニ斯人ヲ以テ允當ト爲スト、文治二年三月、兼實遂ニ基通ニ代リテ攝政トナル、兼實嘗テ神佛ニ祈リ、攝籙タランコトヲ求ム、是ニ至テ其望ヲ遂ク、玉海時ニ兼實ノ子良通亦內大臣ト爲リ、四年正月、兼實父子春日祠ニ詣ル、良通氏ノ長者ニ擬シ、又興福寺ヲ以テ東大寺ニ比ス、時人其驕侈ヲ詆ル、六年正月、兼實其女ヲ後鳥羽天皇ニ納レ、中宮ト爲ス、宜秋門院建久六年、中宮姙メルコトアリ、兼實其男ヲ生ンコトヲ願ヒ、祈禱ノ盛前代ニ超ユ、既ニシテ皇女生ル、兼實大ニ失望ス、是歲賴朝其女乙姬ヲ入內セシメントス、兼實賴朝ノ言ヲ容レ、將ニ之レヲ決セントス、會承仁法親王權大納言源通親等兼實ヲ惡ム、乃チ其議ヲ沮ミ、且ツ奏シテ其職ヲ辭セシム、中宮亦宮ヲ出ツ、通親猶ホ其罪ヲ捃摭シ之ヲ逐ハント謀ル、天皇素ト意ナシ、遂ニ免ルコトヲ得タリ、愚管抄九年天皇位ヲ土御門天皇ニ禪ル、天皇母源在子ハ、法印能圓ノ女ニシテ、源滋子ノ生ム所、能圓西奔ス、滋子宮ニ入リ後鳥羽帝ノ乳母トナル、通親之ト通ス、依テ兼實ヲ譖シ其關白ヲ罷ム、在子宮ニ入リ天皇ヲ生ム、通親外家ノ權ニ據リ、專ラ威福ヲ

弄ス、兼實居常之ヲ憤惋ス、玉海正治元年、賴朝薨ス、是ヨリ兼實益勢ヲ失フ、建仁二年、剃髮シテ圓證ト號ス、一代要記承元元年、薨ス、年六十、公卿補任世ニ月輪關白ト稱ス、尊卑分脈兼實天下擾亂ノ時ニ當リ、才學ニ長シ、正議ヲ執リ、每ニ國家ノ利害ヲ論ス、其宰輔ニ任スルヤ、善政ヲ布キ、言路ヲ開キ、廢典ヲ修メ、以テ天下ノ望ニ協フ、然レトモ賴朝ト善キヲ以テ、法皇ノ猜疑ニ觸レ、廷臣ノ妬嫉ニ遭ヒ、遂ニ其職ヲ保ツコト能ハス、末路悒々トシテ以テ終ル、然レトモ當時ノ賢輔ヲ稱スレハ、今ニ至ルマテ世必ス兼實ヲ擧ク、其日記ヲ玉海ト云フ、時事ヲ記シ意見ヲ錄スル甚タ詳カナリ、世ニ行ハル、玉海、愚管抄、

平安通志卷之五十

卷	枚	表裏	誤	正
四十九	一	廿八	人チシ。富贍。匡方。位二位	人チシテ。富贍。匡房。從二位
	四	廿八	左衛門士府。庶務ニ。藤原民。	左衛士府。庶務チ。藤原氏。
	五		已我妹。緒繼。	已我妹。緒嗣。
五十	二	十五	價徒。檀ニ。	僧徒。檀ニ。
		十七	被被。明ス。	被壽。畧ス。
		十八	あした。かしす。	あらた。からす。
		十八	かひ、地は。	かひ地は。
	三	十六	尙ホ。後朱雀帝。茲ニ云々。又ハ。大外。をにつか。をしむ。用給フ、	猶ホ。後朱雀帝。創。又。大外記。世につか。をらむ。用給フ
		十七		
		十八		
		十九		
	九	十七	下ニ其云々。謀滅。乘船。見地、家卿。思とかけ。愁なかし。中官。	創。謀滅。乘船。見地。卿家。思をかけ。愁なから。中宮。
		十七		
		十八		
		廿九		

110
10
60



平安通志

十九 十六

110
合10
60